

ヒューマンポテンシャルへの畏敬

大阪大学大学院医学系研究科 保健学専攻 統合保健看護学分野
総合ヘルスプロモーション科学講座
早川和生

私が臨床現場から移って教育現場に携わりはじめてから、はや四半世紀が過ぎました。この間、看護を取り巻く社会状況は大きく変わってきました。特にこの2～3年間については、大激変の時代と感じるのは、数多くの看護職の共通認識といえましょう。

しかし、どんなに社会環境が変わろうと、看護学の根底に常に存在する魅力とは何かと問われれば、それは「ヒューマンポテンシャル」を実感でき、自分自身の生きるエネルギーの源泉が得られることであろうと考えています。これは臨床現場でも、教育現場でも同じでしょう。

日本語で言う「知」という言葉の中には、欧米で言う4つの言葉：Knowledge（知識）、Wisdom（智慧）、Philosophy（英知）、Art（技巧）が含まれているといわれています。看護学の中身が全て入っているように思われます。私は看護学の学問的構成要素を考えてみると、次の三つに集約されるように思っています。

①「人間の尊厳」、「人間の神秘」に迫る看護学

②「人間を育む」看護学

長い経験から得られた

「暗黙知」

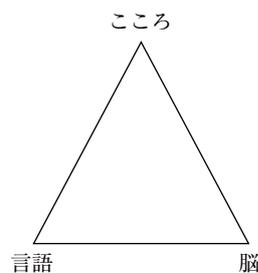


人間が本来持っている能力と可能性が十分発揮でき、その障害を取り除くことができる

「顕在値」へ

③「人間を守る」看護学

現在私の研究室で行っている主な研究の1つに、「乳幼児期における言語発達の遅れとファミリーケアの研究」があります。言葉によるコミュニケーションは、人間が人間たりうる最も高次の能力です。しかも、何もしなくても乳幼児は生後数年でこの高い能力を自然に獲得することは当然のことでありながら、真に驚くべきことです。



言語の構造を支配している原理、つまり偶然ではなく普遍性を有し、人間の精神的特徴に由来する原理を言語研究によって発見することができるかもしれない。

(Noam Chomsky)

非侵襲的「光計測」…光を用いた認知能のイメージング測定

- ・社会性の発達
- ・ケアの癒し度の測定
- ・「ことば」の安寧度
- ・ストレス精神
- ・生活環境・家庭環境と脳の可塑性
- ・乳幼児期の言語能の成長
- ・高齢期における健やかな知的機能の保持と生活環境要因

以上に焦点を当てて研究中です。